

ご視聴の皆さまへ

- 配信動画および資料の著作権は、横浜市リハビリテーション事業団が保有します。
- 動画および資料の無断転載、複製、転用、販売等の二次利用は、固く禁じます。
- この配信動画は、当センター利用者の保護者の方のみ視聴可能です。
- 第三者に動画および付属資料の URL を拡散することはお控えください。

発達障害の基礎知識 ～主に小学生の方向け版～

横浜市西部地域療育センター
医師

YRS
ユアーズ

基礎講座、発達障害の基礎知識をご視聴いただきありがとうございます。ここでは、主に小学生のお子さんを念頭に、発達専門医の立場から基本的な話を解説いたします。

診断の意味

- 発達障害の特性をふまえた育て方のコツを知る
キーワード
- 今すべきこと、今がんばらなくていいことの
整理がしやすくなる
- 発達支援に必要なサービスに
つながりやすくなる

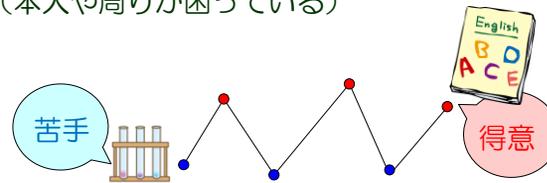


発達障害の診断は、レッテルを貼るためのものではなく、発達障害の特性をもつ子どもの育て方のコツを知るキーワードとして診断を行うものです。診断によって、今すべきことを鮮明にして、逆に今がんばらなくていいことを整理することにも役立ちます。集団場面でどのような支援を行ったら良いかなど、診断があることでその子に合わせた発達支援に必要なサービスにつながりやすくなります。

発達障害とは？

発達上のなんらかの苦手さ・凸凹・特性

何らかの「社会的な不適応」がみられる状態
(本人や周りが困っている)



発達障害を簡単に定義しますと、発達上のなんらかの苦手さや凸凹がありそれにより「社会的な不適応」がみられる、つまり本人や周りが困っている状態のことをさします。医学的には一般的な病気とは区別して考えられており、発達凸凹とか発達特性などいろいろな言い方があります。

主な発達障害

ASD（自閉スペクトラム症）

LD（学習障害）

AD/HD（注意欠如多動症）

発達障害には、ASD、自閉スペクトラム症、LD、学習障害、ADHD、注意欠如多動症があります。
以下にそれぞれ解説いたします。

自閉スペクトラム症(ASD)とは？

「脳の機能」に原因がある発達障害

- 脳の病気ではありません
- ミクロなレベルでの脳の違いといわれています



自閉スペクトラム症、以下ASDと呼びますが、医学的には「脳の機能」に原因がある発達障害の一つとされます。脳の機能といっても、脳の病気ではありません。実際に、脳の画像検査などを詳しく行っても、なんともないことが殆ど全てです。そのため、医学的にはASDは脳の病気ではなく目には見えないミクロなレベルでの脳の違いと理解されています。



ASDの発達上の特徴は大きく2つあります。一つは、コミュニケーションの困難さ、やりとりの苦手さです。これについては次のスライドで詳しく説明します。もう一つは限局しパターン的な興味と行動とありますが、こだわりという言い方で有名です。診察では、お子さんのご様子などからこれらの特性について判断しますが、診断するためにはこれらの特性があることで普段の生活で本人や周りが困っている、つまり生活上の困難があることが条件となります。そのため、診察では、診察室の様子に加えてふだんどうですかという生活の様子と照合した上で診断が行われることとなります。

コミュニケーションの 質的な困難さ

■ 言葉のコミュニケーション

■ 言葉以外のコミュニケーション

ジェスチャー、表情などのちょっとした仕草、
ことばに込められた意図や感情 など



言葉が遅れているだけとはいえない

さて、ASDの最大の特徴であるコミュニケーションの質的な困難さについてご説明します。ポイントは、ASDの特徴は、言葉のコミュニケーションつまり会話だけでなく、言葉以外のコミュニケーションも困難であるということです。言葉以外のコミュニケーションとは、ジェスチャー、表情などのちょっとした仕草、ことばに込められた意図や感情などであり、言葉が遅れているだけとはいえないということです。

マイペース・タイプ

小学1年生 男の子

校庭でみんなが基地ごっこをしている中、一人で鉄塔をみて楽しんでいる。電線や水道の知識が豊富で、教室では図鑑を見ながら話をしてくれるが、相手に説明するというよりも独り言を言っている感じである。



たとえば、マイペースタイプのお子さんの例です。小学1年生 男の子 校庭でみんなが基地ごっこをしている中、一人で鉄塔をみて楽しんでいます。電線や水道の知識が豊富で、教室では図鑑を見ながら話をしてくれますが、相手に説明するというよりもどこか独り言を言っている感じです。ちなみに、このように好きなもの・没頭できるものがあるお子さんの場合は、そのように夢中になれるものを大事に認めてあげることで、お子さんが思春期以降も安定して成長していくことにつながります。

やりとり（社会的相互交渉） の質的な困難さ

- 人とのやりとりが、
 - ・ 乏しく続かない、一方的、受け身
- 他者と意図や感情の共有ができない
 - ・ 「何となく察する」ことができない
 - ・ 一緒に楽しむ、興味を分かち合う意図が乏しい



集団で社会的な行動をとることは**極めて苦手**

コミュニケーションの困難さを、やりとり・社会的相互交渉の質的な困難さと表現することもあります。やりとりの困難さは3種類あり、これについては次のスライドでも説明します。いずれにしても、他者と意図や感情の共有ができないため、何となく察することができなかつたり、一緒に楽しむ・興味を分かち合うという意図が乏しいということがあります。感情の共有ができないとありますが、感情がないとか心がないという意味ではありません。アンテナが作動して相手の状況をパッと察するのが苦手、というような意味合いです。これらの特徴のため、集団で社会的な行動をとることが極めて苦手であることが多いです。

ふざけてる・・・？

高校生 男子

悪い事をして、職員室まで行き先生に謝る。
「もうするなよ！よし、行ってよし！」と
怒られ「すみません！」と頭を下げた直後、
「そういやこの前の試合のことなんだけど」
と余韻なくフレンドリーに語る。



例えば、これは高校生の例です。悪いことをして、職員室まで行き先生に謝るという場面です。これも実際にあった話で、その先生によると、本当に直角に頭を下げ、本当にゴメンナサイということが伝わる実直な様子だったそうです。それで、先生が「もうするなよ！よし、行ってよし」と言って、彼が再び「すみません！」と頭を下げた直後、3秒もたたないうちに、「そういや先生、この前の試合のことなんだけど」と余韻なくフレンドリーに語る、というズッコける話でした。先生からすると、「お前、本当に反省しているのか」と二重に怒られてしまうということです。世の中には暗黙の了解というものがあって、ここでは、せめて職員室を退室するくらいまではしおらしくしていなさいというわけですが、その暗黙が見えず、高校生の彼からすると、もう謝って、先生からも「よし」と言われているので、言語的には理解できているのですが、相手とのコミュニケーションとしてはズレてしまっています。

限局しパター的な 興味と行動（こだわり行動）

- 興味・関心の幅が狭い（概して深いことが多い）
- 特定の物・手順・遊び方・ルール などのこだわり
- いつまでも同じことを繰り返す
- パターンが変更されると不安、パニック、自傷

さて、ここからはASDの発達特徴の2つ目である、こだわりについてです。正式には、限局しパター的な興味と行動といいます。一般的にも、人には何らかのこだわりを持つものでして、一般的なこだわりとASDのこだわりとどう違うかという、実のところは明確な違いはないとされます。ただし、ASDの場合には、一般的なこだわりの範囲を飛び越えて興味や関心の幅が狭く、概して深いことが多いです。こだわりには色々あって、電車や回転するものなど特定の物から手順、遊び方、ルールなど様々です。ドアを開けたり閉めたり、くるくると回転していたりと、いつまでの同じことをくり返したりします。一部のASDの方は、パターンが変更されると不安、パニックから自分をたたくといった自傷に至る人もいます。

まじめさ・・・？

小学2年生 女の子

ルールや決まり事に忠実だが、頑なで融通がきかない。
授業中に談笑している友達に対して、「静かにしてください！」を連呼して、ひんしゆくをかけている。

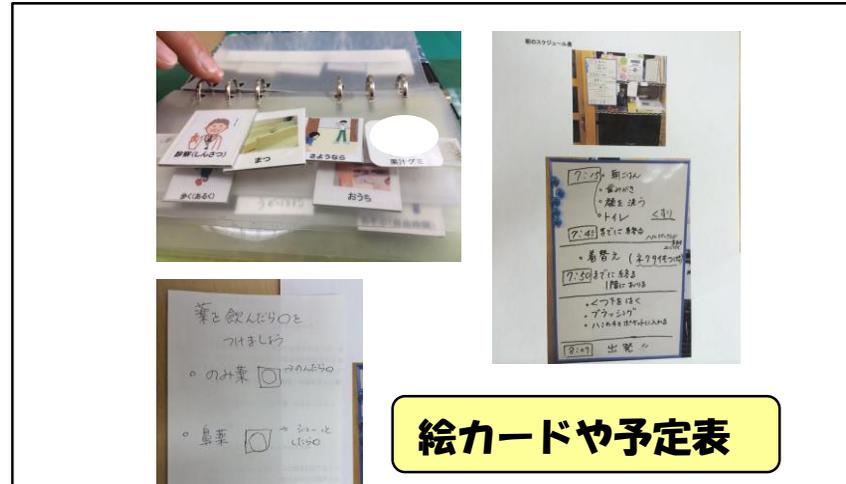


これもこだわりの例です。小学2年生の女の子。ルールや決まり事に忠実だが、頑なで融通がきかない。このルールや決まり事に忠実というのが、この子のこだわりになります。ちなみに、このようなこだわりが小学生のこの時期に出てくるような子は、比較的発達の経過が良いことを経験しますし、後々は社会的なモラルをきちりと守る誠実な人になることが予測されます。ただこのお子さんは、授業中に談笑している友達に対して、「静かにしてください！」を連呼して、ひんしゆくをかけてしまいます。このお子さんは、正しいことを言っているのですが、本人が周囲から受け入れられず損をしてしまう、ということで、どうして周りとうまくいかないだろうと悩んでしまいます。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

ここからは、その他の特徴として、ASDの全員にあてはまるわけではありませんが、育てる上でポイントになりやすい事柄をまとめてあります。一つ目は、目から入る情報の方が耳から入る情報より得意、いわゆる百聞は一見に如かずです。



視覚的な情報が得意な場合、このような絵カードや予定表を用いることで、状況を良く理解して適切に行動をすることができるようになります。

その他の特徴

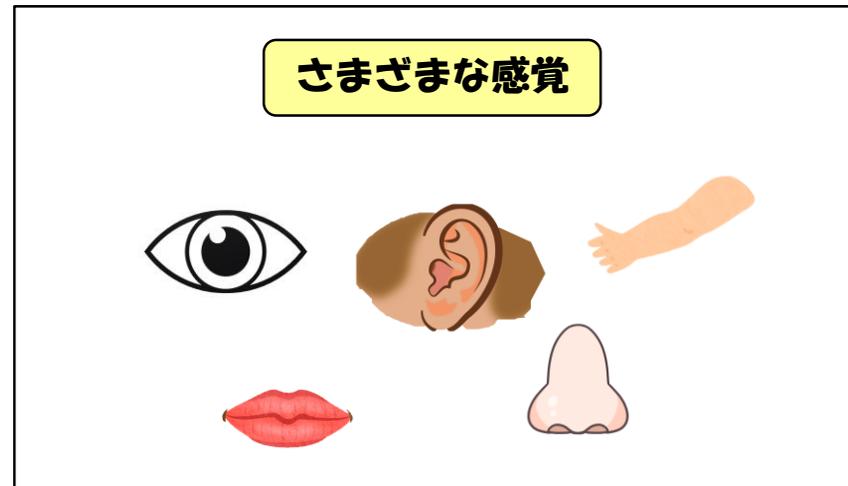
- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

2つ目の特徴は、見通しがもてないと不安になりやすいというものです。裏を返すと不安が強い場合に、見通しをもたせるような支援をすると安心して活動できるということです。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

特定の感覚に過敏あるいは鈍いというタイプの人もあります。



人間はさまざまな感覚がありますが、ASDの人の中には、とてもまぶしく感じる、音や匂いに敏感といった感覚過敏を訴える人もいます。また自分の姿勢が傾いていたり、回転する感覚が鈍いという人もいます。

その他の特徴

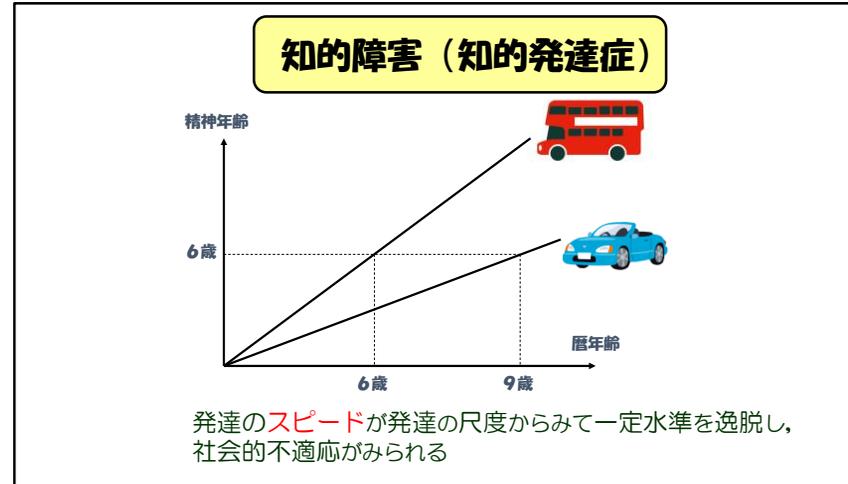
- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

次に、ASDの全員ではありませんが、記憶が良いという人もいます。機械的な記憶が長けていて優れた能力を発揮することもあります。嫌な記憶が残りやすい人もいて、何年も前にあった嫌な出来事をいつまでも鮮明に覚えている、思い出すとつい昨日あった出来事のようにリアルに記憶がよみがえってしまい、それが非常に不快という人もいます。

その他の特徴

- 目から入る情報の方が耳から入る情報より得意（「百聞は一見に如かず」）
- 見通しがもてないと不安
- 特定の感覚に過敏あるいは鈍い
- 記憶がよい（嫌な記憶が残りやすいことも）
- 運動が苦手なことがある（手先、バランスなど）

最後に、運動が苦手なことがあります。運動は、手先を使うような細かい運動と、全身を使うような大きな運動があります。得意という人もいますが、それらが苦手で、学習や生活面で支障が出てしまう方もいます。



知的障害という診断もあります。知的障害は、知的発達症ともいって、発達が年齢に比べてゆっくりな状態を指します。この絵では、二階建てバスのように、横軸の暦年齢、つまり6歳のお誕生日の時に縦軸の精神年齢も6歳の場合、ちょうど平均的な発達のスピードであると判断されます。それに対して、オープンカーのように、9歳のお誕生日の時に縦軸の精神年齢が6歳の場合、年齢に比べて3歳分の遅れがあると考えます。二階建てバスに比べてオープンカーは発達がゆっくりというわけです。発達のスピードは通常、発達の検査などを行い判断します。

LD(学習障害)の主症状

話す・聞く



読み・書き



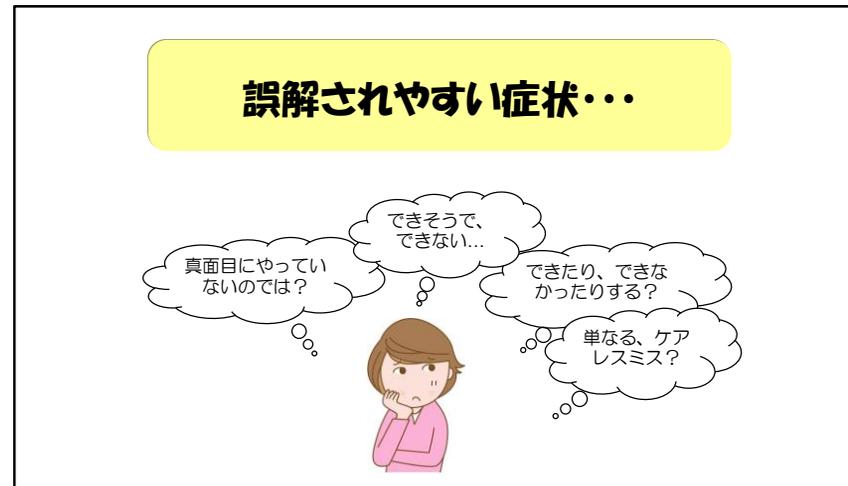
算数



その他, 不器用, ことばの問題, など…

発達全体に遅れがある場合は、知的障害と診断

次はLD、学習障害です。LDは、全体的な遅れはないにもかかわらず、話す・聞く、読み書き、算数といった、人が学習する上の基礎となる発達が特異的に弱さがあることを指します。発達全体に遅れがある場合には、LDではなく知的障害と診断されます。



LDは多彩な学習に関連した症状があり、加えて「誤解されやすい」という特徴があります。全然学習ができないというわけではなく、例えばクラスの中で一番できないというわけではないことも往々にしてあります。

いつも接しているご家族や先生から見ても、真面目にやっていないのでは？できそうでできない、できたりできなかつたりする、単なるケアレスミス、など分かりにくいところがあって本人も周りも悩んでしまいます。

環境改善的アプローチ



読み書きの習得よりも、**授業内容の理解や活動への参加に力点**
本人、学校、周囲の理解が導入には必要となる

LDの対応は、環境改善的アプローチがポイントになります。これは、タブレットを導入して読み書きの補助をしたり、計算機を積極的に使ったり、課題を行う時間を延長するなど、本人を変えるのではなく、環境に働きかける方法です。読み書きの習得よりも、授業内容の理解や活動への参加に力点を置きます。環境改善的アプローチには、本人、学校、周囲の理解が必要になります。

LD診断の意義

- 子どもにあった学習環境を設定できる。
- 子どもの周囲、特に保護者と教師が子どものよき理解者となることができる。
- 不安やイライラなど、二次障害を最小限に抑える。

診断および、詳しい評価は小学生になってから

LD診断の意義は、子どもに合った学習環境を設定することで環境改善的アプローチを進めやすくなります。また、誤解されやすい症状であるLDに対して、子どもの周囲、特に保護者さんと教師が子どものよき理解者となることができます。それにより、不安やイライラなどの二次障害と呼ばれる症状を最小限に抑えることができます。なお、LDの診断およびそのための詳しい評価はなかなか複雑で難しいため、小学生、お子さんにもよりますが小学3年生以降になってから可能となります。

AD/HD（注意欠如多動症）

- Attention Deficit/Hyperactivity Disorder
- 不注意・多動性・衝動性の3つの行動を認める

最後にADHD、注意欠如多動症です。英語の頭文字をとってADHDと呼んでいます。
不注意、多動性、衝動性の3つの行動を認めます。

活発？好奇心？

小学校2年生 男の子

幼児期はとにかくたえず動き回る子であった。小学校に入り、なんとか着席しているものの、足をモジモジさせ落ち着きがない。授業中も注意が散漫になってしまう。本人も、なぜ他の子のように自分がうまくできないのか悩んでいる。



ADHDのお子さんの例です。幼児期はとにかくたえず動き回る子であった。小学校に入り、なんとか着席しているものの、足をモジモジさせ落ち着きがない。授業中も色々なことが気になってしまい注意が散漫になってしまう。本人も、なぜ他の子のように自分がうまくできないのか悩んでいる。

AD/HD（注意欠如多動症）

- 不注意・多動性・衝動性の3つの行動を認める

12歳以前に症状の存在
6ヶ月間以上の症状持続
学校と家庭など、2箇所以上で症状が存在

確定診断は、小学生になってからが多い

ADHDは、不注意、多動性、衝動性の3つの行動を認めますが、それらがあれば即診断がつくわけではなく、一定以上のレベルを超えていることが条件になります。

それ以外にも、12歳前からこれらの症状があること、6か月以上症状が持続していること、学校と家庭など2か所以上で症状が存在することなど、いくつかの条件があります。これらの基準があるため、幼児期には確定診断がつきにくく、小学校にあがってから診断がつくことが多いです。

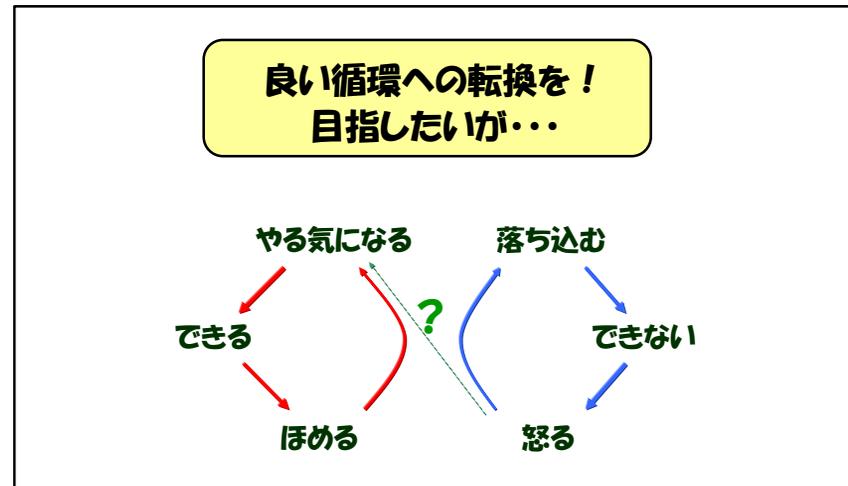


人間はさまざまな状況で行動が落ち着かなくなるものです。

ADHDの多動は、ぜんまいで動くおもちゃのようなイメージで、体が勝手に動いてしまいます。

それに対して、気持ちがあせったり、不安になったり、イライラする時に落ち着かなくなる場合は、ADHDとは別のものであると考えており、対応法も変わってきます。

多動=ADHDではなく、多動の原因を探る、という視点が大事になってきます。

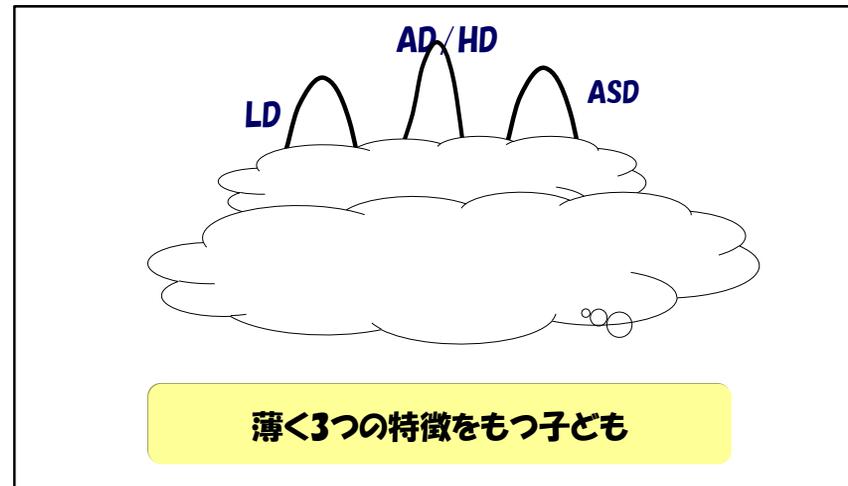


ADHDのお子さんは、生活面でうまくいかないことが多くて、右側にあるように、できない→怒る・あるいは怒られる→そして落ち込むという負の循環に陥ることが問題となります。

できれば左側のように、うまくできることを増やして、ほめられる、そしてやる気になるという循環に持っていきたいところです。

できることを増やすためには、一時期ハードルを下げたあげて、成功体験を持ちやすくした方がよいことがしばしばあります。

なお、回りから怒られて、叱咤激励をうけて、それでやる気になる、ということは診察上はあまりなく、そのようなやり方はあまりお勧めできないことが多いです。



以上、簡単ではありますが発達障害の代表的な3つ、ASD、LD、ADHDについて解説しました。これら3つを色濃く持つわけではないものの、それぞれの特長を薄く3つ持つお子さんも結構います。この絵でいえば、それぞれの山の頂上にいるようなわけではないですが、それぞれの山を下ってきた湖があるふもとくらいに位置するような場合です。薄いけど3つある場合には、それぞれに対して対応する必要があって、より慎重な理解が求められることもあります。